

東京学芸大学・先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット 2025
オンライン研修「多様性が活かせることばの教育 2025」 報告

趣旨

文化間移動をした子どもたちが、その多様性や出身国・地域等での経験を活かし、学級・学校・地域社会の一員としてその力を発揮できることばの教育について考える場として、「子どもたちの多様性が活かせることばの教育」をテーマに、2種類の研修を実施する。新たな視点とアイディアで、学びの場・内容と活動、そして支援のあり方を議論し、かれらをエンパワーメントすることばの教育について具体的に構想することを目的とする。

研修Aでは、高等学校における日本語学習支援に関して環境づくりという視点から捉え直して学ぶ。研修Bでは、子どもたちが成長・発達を十全に送るための教育のシステムを考えるために、幼・小・中・高での学習の連続性を意識したことばの教育について検討する。両研修とも、テーマに関連する情報の提供（講義）・現場の取り組み実践例・参加者間の交流／ワークショップで構成する。

研修A「多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり」

＜ねらい＞

高等学校において「特別の教育課程」による日本語指導の制度化が施行されて3年目を迎えた。外国人生徒等が、共生社会の一員として自己を実現するためにも、この制度を利用して日本語指導の充実を図りつつ、その学習を教科学習、キャリア形成、社会的活動への参加等に関連付けて、自己を開拓するための力を育むことが期待される。

研修Aでは、多様な言語的文化的背景をもつ生徒たちが自分の未来を切り開き、社会参画するためのことばの教育・支援を検討する。それには生徒自身が、自分をもつ潜在的な力に気づき、さらにその力を能力として開拓できる、つまりかれらをエンパワーメントすることが重要である。本研修では「日本語指導」を、外国人生徒等が、その多様性を活かして主体的に参加し、新たな価値を創造する「ことばの学習」のための「学習環境のデザイン」という視点で捉えなおす。学習環境を、「活動」「人工物（教材・教具等のリソース）」「コミュニティ（共同体）」の3つの側面からいかにデザインするか、事例や現場の取り組みをもとに具体的に学ぶ。

1 研修A 報告

(1) 第1回研修 概要

日時	2025年6月8日（日）10:00 - 12:30
主たる受講者（対象）	高校で学ぶ外国人生徒等、および高校生相当年齢の子どもに日本語指導・学習支援等の支援を実施している教師・支援者等
テーマ	学習環境としての活動のデザイン
ねらいとする資質・能力*	＜捉える力＞ エ 認知面の力と教科などの学力を年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。

	ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。 <育む力> セ 学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容と日本語を統合した指導・支援をすることができる。 <変える力> ヒ 子どもが自身の多様性を支援にして活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
研修内容	1 学習環境デザインの考え方で、「日本語指導」の活動を取り上げて検討する。生徒の興味・関心に基づき、母語・母文化、これまでの経験、思考・判断する力を活かして、ことばの力を耕し育む活動について具体的な事例をもとに考える。 2 「特別の教育課程」による日本語指導を実施している東京都立青梅総合高等学校が、具体的な指導体制や指導内容について報告する。
事前学習課題（参加に当たって）	東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット（2024）『高等学校における日本語指導の制度化 「特別の教育課程」としての編成・実施について』 <1> 基本的な考え方と制度の解説 <2> 「特別の教育課程」として日本語指導の編成・実施のポイント <3> 高等学校における日本語指導の現状と課題

※文部科学省 「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会 2019）にもとづく

(2) 研修 A 第 1 回 実施計画

活動展開	具体的な内容・活動	利用した資料等
①説明「研修テーマ、趣旨、目標」	・本研修の趣旨 ・ねらいとする資質・能力 ・研修終了後の振り返りの実施	・研修趣旨のスライド資料 - 参考文献：山内（2020）
②講義「学習をデザインする」	・学習環境 ・デザイン活動とは ・デザイン思考	参考文献：ハーバード・サイモン（1999）／ティム・ブラウン（2019）
③講義「学習」環境としての活動	・創造的経験的学習（ワークショップ） ・タスクベースの言語指導	参考文献：山内（2020）／松村（2017）
④講義「日本語指導・学習支援例」	・総合的な学習の時間「金融リテラシー」 ・学校設定科目：日本語「折れ線グラフから読み取ろう」 ・学校設定科目：日本語「受け身」 ・特別の教育課程：日本語指導「質の高い教育をみんなに」	- 参考文献： ・本ユニット 2023 年度研修報告書 ・本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」

③事例報告 ④グループワーク 「生徒の経験や力を活かす活動」 ⑤振り返り	報告：「特別の教育課程」による 日本語指導実施校の取り組み 東京都立青梅総合高等学校 教諭 永田明久氏 質疑応答： 口頭で・チャットへ書き込みで 小グループで話し合い ・自己紹介 ・生徒のもつ力や経験を活かすための学習活動のアイデア アンケート記入 ・満足度 ・今後の活用のアイデア ・資質・能力の向上の有無	講師作成スライド グループ活動の課題 話し合い:生徒の経験や力を活かす活動 ご自身が行っている日本語の授業や学習支援で、生徒が知っていること(学んだ知識や経験したこと)や好きなこと・できること(趣味・運動、アート、その他何でも)を活かして行っている活動を紹介してください。できるだけ、生徒自身が決定し、探究し、創造する活動に。また、協働で課題を達成したり、対話によって多様なアイデアに触れて考えを広め、深められるような活動を。 実際には行ったことはないけれども、こんなアイデアがあるという紹介でも構いません。 ☒ 生徒のどんな知識・経験・強みを生かして ☒ どんな言葉・表現を使いながら ☒ どんな活動をするか
参考文献・資料 ・山内祐平（2020）『学習環境のイノベーション』ミネルヴァ書房 ・ハーバード・サイモン（1999）『システムの科学』パーソナルメディア ・ティム・ブラウン（2019）『デザイン思考が正解を変える』早川書房 ・松村昌紀（2017）『タスク・ベースの英語指導』大修館 ・本ユニット 2023 年度研修報告書 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M23_kenshu04_ogikubo2.pdf ・本ユニット（2023）「高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf ・本ユニット（2024）「高等学校における日本語プログラム」 : https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html		

3 成果

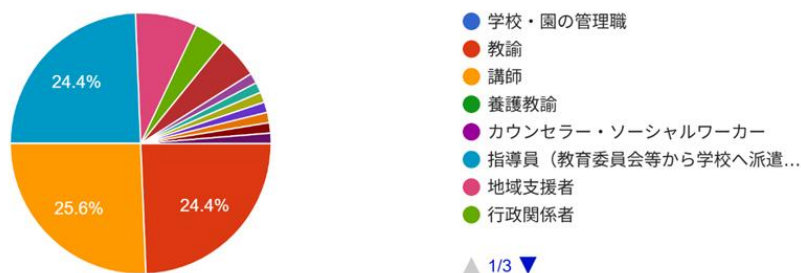
参加申し込み数：156 当日参加者数：121 アンケート協力者数：78（回収率 63.9%）

<アンケートより>

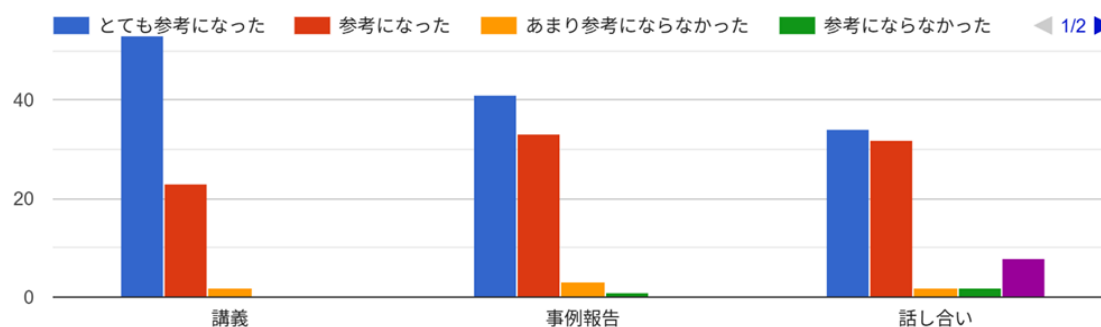
①参加者の背景（立場）

Ⅰ ②どのような立場で活動（勤務）していますか。

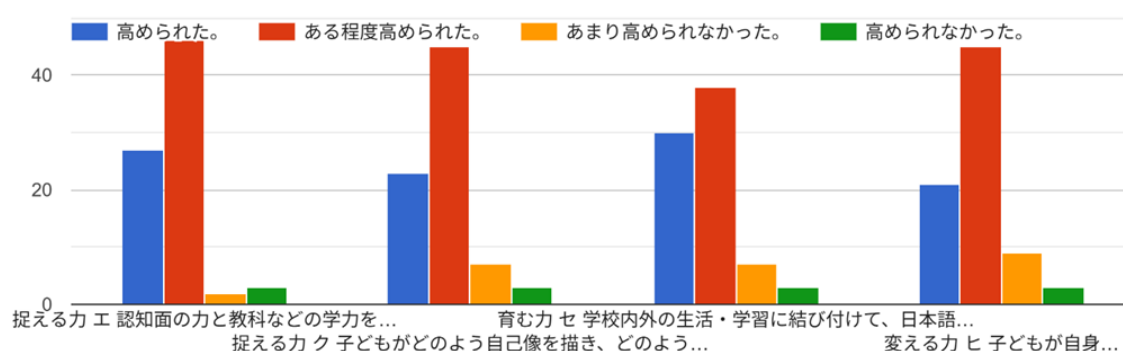
78 件の回答



②満足度「参考になったか」



③めあてとした資質・能力の向上について



④寄せられた参加者の声（自由記述回答より）

- ・日本語学習が生徒たちの生きた日本語につながるもので、自己実現の手段になるような授業を考えなくてはいけないといつも考えていたので、生徒の経験や良さ強みなどの自己資源を生かした他者や社会との関わりをもつ言語活動を通して言葉の力を高めていくことが必要であるということを改めて認識できた。
- ・日本語支援を始めて間もないため、授業内容や学習者の日本語の上達ばかりに目が向いてしまう。本研修に参加し日本語支援員としての取り組み方を認識させられた。単なる日本語指導の場にならないよう今後の学習者との向き合い方が非常に参考になった。
- ・学習デザインにおいて、学習環境の4要素から捉える視点が興味深いと思った。資質・能力ベース、主体性の重視、経験をもとにした新しい価値の創造など、日本語指導に限らず求められているところかと思うが、それをいかに外国人児童生徒等の多様性や力を生かした形で特別の教育課程でも実現していくのか「活動」をもとに検討することができ参考になった。ブレイクアウトルームでさまざまな立場の方と交流でき、交流の話題も明確であったので、有意義な時間となった。
- ・タスクベースの言語指導について、自分の中で感覚的になっていた部分がとても明確になった。また、事例報告では、活動の目的が生徒たちの現在だけではなく将来の生活にもつながるように設定されていたり、生徒の経験を活かした活動を設定されていたりと具体的に知ることができた。今後の自分の指導でも実践したい。

・事例報告が特に参考になった。講義や最後の話し合いのテーマが生徒の経験や強みを生かす指導展開ということだったので、従来の日本語そのものを教えることはできないのかと不安に思った。しかし、事例報告では少人数で日本語を教えているということだったので、そういう授業をやってもいいのだと少し安心した。そして、1年次、2年次、3年次の目標は参考になった。日本語の授業で外部からの支援者が多くうらやましい。

・参考になったのは、教師の資質をはっきりと言語化し、具体例も示してくれたこと。ただ、これまでの実践はどうだったのか、今後自分の実践でどのように具現化できるか、自分一人ではなかなか客観的な振り返りも、今後の計画も立てにくいと感じている。国語科としての授業づくりは、いろいろ相談しながら行っているが、日本語の指導は相談できる環境にない。

・主に総合的な学習の時間において、まずは現在の社会情勢を知識として提供することで生徒の体験や経験が強化、更新されるように仕組みたい。そこから、課題解決のプロセスを言語化したり、他者と関わりをもつための表現を学習したりして、それらを活用して協働学習に参加できるようにしたい。担任と連携して、個別指導の時間と学級で参加する時間とを調整し、学んだことを発揮できるように取り組みたいと思った。

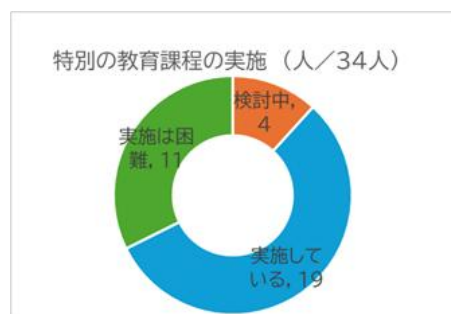
・ブレイクアウトルームで地域と生徒をつなぐ「架け橋」が日本語担当者だというお話があり、生徒自身が将来「架け橋」になることは意識していたが、その礎となるものは私との学習で作るんだなと自分の仕事に対して認識を改めた。母語や母文化、生徒自身の関心などを深めるだけでなく外への発信の機会を考えていこうと思った

⑤「特別の教育課程」の実施について（高等学校所属 43 人中）

「特別の教育課程」を実施：19 人

「検討中」：11 人

実施は「難しい」：4 人



<現状について>

実施しているとの回答から

- ・R5 年度に校内検討委員会発足、R6 年度教育課程作成、調整、校内組織立ち上げ、今年の 4 月から導入実施。
- ・1，2 年生対象に各学年に週 2 回、1 コマ実施。定期テストもあり、単位もつくため、計画的な積み重ねの授業ができる。（3 年生は放課後自由参加の日本語クラス）
一方で、キャリア形成を考えると、卒業後は日本語学校のようなビジネス系専門学校に進む生徒やバイトに収まる生徒がほとんど。高校での日本語学習はどこまで必要なのかと悩む。生徒個人の目標によるところも大きい。
また、母国での教育と日本の教育の違いから、少しでも学習につながるようにするには、高校においても一から勉強方法を教える必要があるのではないかと思い、発問と板書とノート指導に取り組んでいる。

「検討中」との回答から

- ・学校設定科目として「日本語」は設けているが、十分ではなく、「特別の教育課程」による日本語指導として増単してほしい。しかし、カリキュラム変更にもかかわり、また全日制普通科なので制約が多い。現在検討しようとしているようだが...

実施は「難しい」との回答から

- ・本来「特別の教育課程」にすべき授業を実施しているが、長年継続してきていること、人数が多くて書類の作成等の手間が増えると感じてしまっていること、放課後に「特別の教育課程」を設けるか検討し始めていること（組織や仕組みの見直し・検討中であること）などから、現時点では「特別の教育課程」にはしていない。
- ・「特別の教育課程」は導入していない。一般コースとは別に、日本語学習コース(日本語の授業が各学年4単位設定されている)を開設している。日本語指導が必要と認められる生徒は日本語学習コースにて学習している。日本語学習コースの特徴は、日本語の授業、さらに、国語科、数学科、理科、地歴公民科の授業は、一般コースとは別に少人数・やさしい日本語で行われている。

<企画・実施者の所感>

アンケートでは、満足度も、資質・能力の向上についても高評価であった。学び手は能動的に物的・社会的環境と相互作用しながら学ぶという学習観にもとづく「学習環境デザイン」の考え方で事例を紹介し、話し合いの場を設けたことは、企画者としてもチャレンジであったので大変うれしく感じている。さらに、グループワークの交流について、情報を得られた、新たな考え方に出会えた、エネルギーをもらった等の感想もあった。オンラインで一時的に参集するメンバーではあるが、目標を共有するコミュニティ的な色彩も帯びていたように感じ、オンラインでのワークショップ活動の可能性も感じられた。

また、青梅総合高等学校での取り組みの報告により、制度・システムや受入れ指導体制や、実施している日本語指導・教育支援に関する詳細な情報を得られた。そのため、高校教育の仕組みの中で、多様な言語的文化的背景をもつ生徒の「経験や力を活かし」て、協働で探究・創造活動をどうデザインするかについて、自身の現場と生徒の実態に鑑みて検討し、この研修での気づきや学びを、今後どう活かしていくかまで、具体的に提案くださる方も少なくなかった。

「特別の教育課程」の実施状況に関し、具体的に情報を提供くださった方も多く、学校による日本語指導の実施に対する認識・状況の違いや困難に関し、参考にさせていただいた。最後に、取り組みを報告くださった永田先生、そして参加者の皆さんに、改めて感謝申し上げます。

4 資料（URL にアクセスすれば、ダウンロードできます）

①趣旨・講義資料／グループワーク課題提示 齋藤ひろみ 東京学芸大学

②報告資料 永田明久 東京都立青梅総合高等学校